報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

2021年4月8日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：河上繁樹

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☑特別研究期間　　□自由研究期間 □大学共同研究　　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	装い〈染織が彩なす服飾美〉の美術史的研究
研究実施場所	関西学院大学第1教授研究館本館410号室および自宅を主とし、必要に応じて展覧会などが開催されている現地へ赴き調査研究をおこなった。
研究期間	2020年4月1日　～　2021年3月31日（12ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

これまで美術史学の立場から日本の前近代における染織および服飾に関して各時代における個別的、具体的な事例を対象に研究をおこなってきた。特別研究期間においては、これまでの研究成果をもとにして「装い」という視点からの通史的な研究を進めた。

日本の服飾の中心的存在である「きもの（小袖）」に関して、2020年度には東京国立博物館で特別展「きもの」、ロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館で ″Kimono: Kyoto to Catwalk″ が開催された。この2つの展覧会を見学することは、本研究を進めるうえで重要な課題の一つであったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて現地調査がおこなえず、予定を大きく変更せざるをえなくなった。この変更を踏まえ、これまでの自分の研究成果を再検討して、近い将来に一冊の研究書として集成できるように時代順に以下のような九つのテーマを設け、各論ではそれぞれテーマに関連する絵画資料を選定して論文の冒頭に掲げ、そこに描かれた服飾の諸相から具体例を提示し、問題を敷衍して考察した。

(1) 雅の装い　和風化する服飾と「唐」への憬れ
(2) 仏法をまとう　請来された高僧の袈裟
(3) 外交の装いⅠ　足利義満の「日本国王」冊封
(4) 外交の装いⅡ　龍になれなかった豊臣秀吉
(5) 姫君の装い　桃山時代の華麗なる服飾
(6) 傾く装い　片輪車の文様史

(7) 花洛の装い　東福門院の小袖から友禅染まで
(8) 物語る装い　『源氏物語』と『伊勢物語』を模様にした小袖
(9)「いき」に装う　江戸に生まれた服飾美

以上の九つのテーマのうち、(1)(2)については未完であるが、もとになる論文はすでに執筆済みである。(1)は平安時代の服装に関して、《源氏物語絵巻》竹河二（徳川美術館蔵）に描かれた大君、中君の細長や周辺の女房が着用する女房装束の襲の色目に注目し、季節感を意識した王朝人の装いに見られる情緒性に言及したうえで、さらに襲の色目における吉祥性について述べる。また、宋代に四川で産出した蜀錦のうち「細錦」と呼ばれる錦がわが国において「唐錦」として受容された可能性について言及する。

(2)では《無本覚心像》（興国寺蔵）の袈裟に描かれた文様に注目して、南宋墓出土の染織品を参考にながら鎌倉時代に舶載された南宋の織物について考察をおこなう。鎌倉時代には禅宗の興隆とともに南宋の高僧が来日し、あるいは日本の僧が入宋するなどして同時代の袈裟が請来された。その袈裟に用いられた綾や顕文紗の文様に関して南宋的な特色を指摘する。

(3)は足利義満が明朝の永楽帝に冊封された際の服装について、二幅の《足利義満像》（いずれも鹿苑寺像）をもとに義満像の服装が法服に平袈裟という法体装束の最高礼装であることを述べ、それと同じ服装で応永9年（1402）9月5日に北山殿でおこなわれた明使との接見に臨んだこと、その後義満は明朝から金印や九章冕服など親王相当の冠服を賜ったが、常服については親王ランクよりも下位の麒麟服を与えられた可能性があることを指摘した。

(4)では(3)と同じく明朝の冊封に関する服装について、豊臣秀吉の事例を取り上げた。《豊臣秀吉像　弓箴善疆賛》（高台寺蔵）など神影では唐冠をかぶった秀吉像が描かれる。そこには秀吉の明国支配への野望がうかがえ、やがて「唐入り」をめざして文禄の役を引きおこすが、その講和に際して秀吉は明朝から「日本国王」に冊封された。その折に秀吉に頒賜された冠服類が京都の妙法院に伝来することを明らかにし、明朝の冊封に関する服装について詳述した。秀吉には郡王相当の麒麟服が下賜され、秀吉が皇帝のシンボルである龍袍を手にすることはなかった。

(5)では《お市の方像》（持明院像）に描かれた小袖に注目し、桃山時代の武家女性の服装を彩った唐織、繡箔、辻が花染について述べた。室町時代から桃山時代にかけて、唐織や繡箔はステイタスを示す織物として機能し、絞りによる辻が花染も上層階級の服装に浸透した。現存する小袖遺品や京都の呉服商雁金屋の史料などをもとにして、お市やその娘である淀殿、お江、秀吉の妻ねねなどが着用した小袖について考察した。

(6)では《国女歌舞伎絵詞》（京都大学附属図書館蔵）の阿国の小袖に描かれた片輪車の文様に焦点をあてた。平安時代以来の片輪車の文様史の流れをたどりながら、平安時代には仏教の法輪を隠喩する片輪車が江戸時代初期においてはかぶき者が片輪車の文様の衣服を着用することで「どうしようもない」という諦念の気持ちをあらわすようになったことを論じた。

(7)では《舞妓図屏風》（京都市蔵）に描かれた遊女の小袖を手がかりに江戸時代前期の遊女たちの衣裳の特色を明らかにするとともに、雁金屋の史料にもとづいて東福門院の小袖の特色を論じ、鹿の子絞りや金糸刺繡で飾られた豪奢な小袖から、新たにインドからもたらされた更紗染の流行、そして友禅染の成立に至る江戸時代前期の小袖の流行について述べた。

(8)では《邸内遊楽図屏風》（サントリー美術館）に描かれた若衆が着る小袖の橋の図柄に注目し、橋の模様を恋愛に関する文芸的な表象としてとらえ、小袖における『源氏物語』や『伊勢物語』に取材した文芸的な模様の諸相について考察し、小袖模様と文学との関係について論じた。

(9)では《江戸風俗図巻》（細見美術館）に描かれた通人の服装を端緒に『遊子方言』や『当世風俗通』などの洒落本、あるいは鳥居清長の浮世絵に表現された通人や遊女の描写をもとに、江戸の遊里で生まれた「いき」の美意識が遊里からさらに広い範囲に拡大し、江戸時代後期の服装にどのように反映したかについて述べた。

以上の九つのテーマを通じて、人が「装う」ことの意味を探った。『二十世紀モード史』の著者デュ・ロゼルは「モードの歴史とは、衣服の歴史ではない。衣服と衣服を着る人の関係の歴史である」という。この「モード」という言葉を「装い」と置き換えることもできる。衣服に求められる機能は、防寒という実用性のみならず、社会性や自己表現など他者の視線を意識させる役割が大きい。また、文様や模様は単に身を美しく飾るだけのものではなく、それらを図像という視点からとらえてみれば、そこには豊かな表象の世界が広がっている。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内
※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで
提出先：研究推進社会連携機構（NUC）
※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。
◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。